

神事・仏事と曲物

——曲物の民具学的研究の断章——

岩井 宏實

はじめに

1. 神器・祭具としての曲物
2. 神饌容器から見る曲物の変遷

3. 仏教儀礼と曲物

おわりに

論文要旨

曲物は、剣物・挽物・指物（組物）・結物などとともに木製容器の一類であるが、その用途はきわめて広く、衣・食・住から生業・運搬はもちろんのこと、人生儀礼から信仰生活にまでおよび、生活全般にわたって多用されてきた。そして、円形曲物・橢円形曲物は、飛鳥・藤原の時代にすでに大小さまざまなものが多く用いられ、奈良時代には方形・長方形のものがあらわれ、古代において広くその使用例を見ることができる。

今日広く普及している桶・樽などの結物は、鎌倉時代後期から室町時代初期にその姿を見せるが、実際に庶民の日常生活に広く用いられるようになったのは、近世になってからである。したがって、それ以前は桶といえどすべて曲物であった。

こうした曲物は神事・仏事にも多く用いられており、神具でいえば御樋代・奉納鏡筥・火桶・忌桶・三方・折敷・折櫃・行器その他さまざまな形状の神饌容器がある。また仏具では經筒内容器・布薩盤・闍迦桶・淨菜盆あるいは各種仏具容器として用いられている。神事や仏事は古風を尊び、できるだけ原初の姿を伝承しようとする風があるゆえ、それに用いる神具・祭具や仏具も古い用法や形状を伝えているものが多い。

そこでそうした現行顯在曲物を検討していくとともに、出土遺物や文献資料あるいは絵巻物などの絵画資料をあわせて考察すると、曲物の様式的変遷も明らかになってくる。その結果、曲物のはじめは底板が固定されたものではなく、平らな板の上に側板を載せただけのもので、つぎに底板を側板の口径より大きく切り、随所に孔をあけて紐や樹皮で側板を底板に綴じつけたものになり、さらに底板に側の内径にあたる部分を厚くし、側板の接する部分から外側を薄くし、底板に側板がよく納まるようにしたカキイレゾコに似た仕様のものへとかわり、そこから漸次進歩して今日見るかたちになる過程を知ることができる。